

森鷗外の「キタ・セクスアリス」と「独身」

清田 文武

1. 「キタ・セクスアリス」の金井湛の体験

1999年「日蝕」(『新潮』1998・8)により当時史上最年少で第120回芥川賞を受賞して話題になった平野啓一郎に、自身とおぼしい小説家と女性編集者とのホテルにおける一夜を描いた「高瀬川」(『群像』2003・1)がある¹。作中性的描写が多いのであるが、このことについて自ら次のように述べている²。

こうした作品が一つもない作家はうそくさいと感じていた。性の問題は人間が生きている以上、避けられない。僕が森鷗外を好むのは『キタ・セクスアリス』を書いているから。清純派女優だってぬれ場を演じることがある。僕も一度は徹底して書こうと思った。

この作家が鷗外の作品で注目したものは少なくないが、こう批評した「キタ・セクスアリス」(『スバル』1909・7)は、ラテン語のタイトルで性欲的生活の意味であるという。作中人物自らが、息子には読ませたくないと思い、その題を“VITA SEXUALIS”と付け、文庫の中へ投げ込んでしまったという形で擱筆したもので、掲載誌が発禁処分を受けるなど、問題作として当時巷間をにぎわせた作品で

¹ この小説はその後平野啓一郎の小説集『高瀬川』(講談社、2003)に収められた。

² 「書く→語る〈3〉作家・平野啓一郎さん」(『新潟日報』2003・7・21)参照。なお平野啓一郎と鷗外の作品とのかかわりに触れたものに、平野啓一郎「我、如何にして作家となりしか」のインタビュー(『文学界』1999・7)と拙稿「森鷗外「羽鳥千尋」論(下)」(『新潟大学教育人間科学部紀要』第5巻第2号、人文・社会科学編、2003・2)及び拙著『鷗外文芸とその影響』(翰林書房、2007)がある。

ある。鷗外は上官から譴責処分を受けたのであったが、折から文壇を席捲していた自然主義を強く意識した自伝的要素の濃い小説といつてよい。

このような作中、上京して後に留学もし、今は大学で哲学史を講ずる^{かないしずか}金井湛が往時を振り返り、十四歳の夏のことを書いた一節で、同年くらいの尾藤齋一——鷗外と同郷出身の伊藤孫一に擬せられている——との交友に筆をやった箇所から観察を始めたい。この友だちの母親（継母）に関する妙な体験のことである。湛が齋一を訪ねると、意外にも知っている家従（旧藩主にかかわる家務を扱う人）に出くわし、継母はそのことを弁解したのであるが、友は不在であった。別の機会に同様の状況で、また言葉を交わしたが、その際の奥さんの目も鼻も口も大きく、それに口は四角のように感じたという。そして、「頬つぺたをおつ附けるやうにして、横から僕の顔を覗き込む」彼女の息が、妙に熱く感じられ、それと同時に、「急に奥さんが女であるといふやうなことを思つて、何となく恐ろしくなつた」ので、「僕は又来ます。」と言つてお辞儀をして駆け出し、ようやく遠のいたあたりで、仰向けに砂の上に寝ころんだというものである³。

「すぐ上の^{ところ}処に、^{のうぜん}凌霄の燃えるやうな花が^{むらむら}簇簇と咲いてゐる。蝉が盛んに鳴く。」という文が続くが、湛は、しかし、友にはこの時のことを話さず、心中に仕舞い込んだのであった。以前別の家従が楊弓店に連れて行くというので付いて行った際に、白粉を付けた女たちの顔が普通の女とは違い、どの店でも同じ型で、「眉はなる^{だけ}丈高く」、
「目をなる^{だけ}丈大きく^{みげ}睜」つて、「物を言つても笑つても、鼻から上を動かさない」ようにしている変な顔から受けた異様な感じを、この時の齋一の継母にも感じたのである。湛は後日友の継母が里へ返さ

³ この前には六歳の湛が、近所の後家さんと娘とが絵本を見ていた際、このことで問いを掛けられて答えに窮し、この時に似た「をば様、又来ます。」という返事を残して駆け出したとあり、このことは誰にも話さなかったと書かれている。

れたということを聞いたのであった。

上の凌霄^{のうぜん}に蟬^{せみ}の声を取り合わせた描写は、「魔睡」(『スバル』1909・6)で、「木瓜^{ぼけ}と杜鵑^{きつぎつじ}花との花が真赤に咲いて、どこか底に温みを持った風が額に当る。」と記し、法科大学教授大川渉が、妻が鴛色の長襦袢を脱いでいる場面を想像して「不愉快」に感じたとある条を想起させる。医師により魔睡すなわち催眠術をかけられ、変なことをされた可能性のある妻が帰宅して着替えをしているところに関係する、大川の心理を描写する一節である。燃えるような花の表象に対する少年と真赤な花のそれに対する教授との心理に響き合うものを感じさせ、関心を引く⁴。

作中湛十八歳の時にも登場する齋一は、その学生生活の経済を、父に代わって支えていた伯父の事情により、共に医科を目ざしていた学業を断念し、故郷に帰って小学校に勤めると言う。気の毒でたまらなく思う湛に、彼は別れ際に唐突なことを言い出したのであった。

「僕の伯父^{をち}の立ち行かなくなつたのは、元はをば^たの為めだ。」

「をばさんはどんな人なんだ。」

「伯父が一人でゐたときの女中だ。」

「ふむ。」

「それがどうしても離れないのだ。女房に内助なんといふことを要求するのは無理かも知れないが、訣^{わけ}の分らない奴^{やつ}が附いてゐて離れないといふものは、人生の一大不幸だなあ。左様^{さやう}なら。」

こうして齋一が「午過^{ひるすぎ}の日のかつかつと照つてゐる、かなめ垣の道に黒い、短い影を落しながら、遠ざかつて行く」あたりは、時刻的にも上掲二作の場面を思い出させるが、湛は、友は置き土産に諷諫を残して去って行ったかと考える。すなわち事は自分の使っている女中にかかわることではないかと思いをめぐらせる。卒業試験を

⁴ 拙著『鷗外文芸の研究 中年期篇』(有精堂、1991)、大塚美保著『鷗外を読み拓く』(朝文社、2002)の各「魔睡」論の章参照。

控えていたため、十六歳くらいに見えるお蝶という、知り合いの娘が召使いとして付けられ、家から離れて生活を始めて間もなくのところへ、齋一が訪ねて来てこの対話がなされたのであった。

それまで殆ど話をしたこともないお蝶を女とも思っていなかった湛は、最近の様子を記憶の中から探ってみる。今朝のこと、散歩から帰ってみると、蚊帳を畳み終わっているかと思ったのに、彼女は畳んだ蚊帳を前に、目は空^{くう}を見てぼんやりして坐っている。この時からお蝶に注意を払っていると、飯の給仕の時の表情や態度、台所で洗いものをする際の様子等々、変わって来たことに気づき、次第に不安が増してくるようになる。そして、齋一が、父や伯父のもとで起こったことから、お茶を持って入って来た彼女の態度に何かを発見したのではないかと思い、湛は母親の許へ帰ったのであった。お蝶の精神か神経かの情態に変化があったのかどうか、恋愛が芽ざしていたか、性欲が動いていたか、自分の想像が勝手にはたらいただけであったのか、それらを知らずにしまった、と書いて十八歳の項は終わっている。

2. 金井湛と「独身」の大野豊その他の人

こうした人物の体験を視点とするとき、問題作の半年後に発表の「独身」(『スバル』1910・1)に注目しなければならない。1989年夏から足掛け四年の転勤生活を送った九州・小倉における鷗外の日常の一齣に題材を得たもので、作中人物が「キタ・セクスアリス」と類似のことを語る場面が見いだせるからである。そもそも「独身」は、「小倉の冬は冬といふ程の事はない。西北の海から長門の一角を掠^{かす}めて、寒い風が吹いて来て、蜜柑^{みかん}の木の枯葉を庭の砂の上に吹き落して、からからと音をさせて、庭のあちらへ吹き遣つて、暫くおもちゃにしてみても、とうとう縁^{えん}の下に吹き込んでしまふ。さういふ日が暮れると、どこの家でも宵^{よひ}のうちから戸を締めてしまふ。／外はいつか雪になる。をりをり足を刻んで駆けて通る伝便^{でんびん}の鈴^{おと}の音がする。」と写生文で始まる、詩人安西冬衛が、「小倉の冬の描写には

いつも感動する。」(日記 1945・11・6) と記した短篇小説である⁵。

作品の世界は、小倉の町の広告柱と伝便との説明(一)、一度結婚したことのある大野豊の家への友人の集まりの様子(二)、一人目の独身生活者についての話(三)、折から禅僧の入って来た際の一室の様子(四)、二人目の独身生活者についての話(五)、主人の大野の生活中的話柄と縁談を勧める手紙のこと(六)、と構成されている。四十歳になる大野は、作者と職業は違い、帝国採炭会社の理事長として東京からこの地に赴任して来た人物で、今は独身で下女を置いているのであるが、食事をめぐる独身者の有妻無妻のことをきっかけとした客の二話の要点は、独身者が女中を妻にした経緯にある。

作中の一つ目の話は、客の一人の裁判所長がかつての同級生について語る、新発田で裁判所の判事を務めていた男の場合である。幾日も続く雪のため借家でひとり部屋に閉じこもっていた判事が、ある吹雪の晩、壁を隔てた隣り部屋の下女も寂しく思っていると思い、針仕事を持って来てはどうか、と声をかけてから、部屋に入り隅で小さくなって縫い物を始めたという。ところが、ある晩隣室で溜息をし、呻吟して寝返りをするらしい彼女に、どうかしたのかと声を掛けたときから、部屋に来るようになり、あとは端折ると言う。それから下女が下女でなくなり、男は職務上後悔したが、結局この女を妻にして今は東京で立派にやっではいるものの、教育のない女のことから、何かにつけて困っている、というのである。聞き手の一人は、「もうおしまひか。竜頭蛇尾だね。そんな話なら、誉めなけりやあ好かつた。」と冷やかしたのであった。新発田には鷗外も若い日に医官として二度巡回しており、「ああした土地柄」と言ったのは、雪国でもあり、北国の元城下町で連隊が置かれ、農村に囲まれているような地方の特性に触れたものに相違ない。この判事の話は、齋一の伯父の場合に似たところがあるらしいが、「キタ・セクスアリ

5 安西冬衛における鷗外については拙著『鷗外文芸とその影響』(翰林書房、2007) 参照。

ス」に「性欲が人の生涯にどれだけ関係したか」と書く視点が「独身」にも織り込まれているのではなからうか。

話が終わったところへ、戸口で足駄に付いた雪を落とす音を立ててから、主人の友である禅僧が入って来る。古本屋で目にした仏教書のことなどをひとしきり話題にするが、それまでの話が話であっただけに、荒れ寺に住まいして俗に疎く、いつも微笑みを湛える若い僧の登場により、作中に滋味のある一齣を点綴する形になっている⁶。次に客の一人で近く洋行するという市病院長が、小児科医院を開いている医師のことを語る。その細君が病没して忌中のところへ鯛が届けられ、医師が近所を聞き回ると、女中のお梅さんが、稻荷様の下さったものだと言い、すぐ料理をして食べさせたという。以後時々稻荷の託宣があり、しまいにはこの女中との婚礼の託宣が下り、結局彼女は、入院の子供もなつく、好い細君になったとの話である。判事の場合とは内容的に一つの対照をなすが、語り口はともにフモールをまじえてその妙を發揮している。鷗外の作品に話説(はなし)のおもしろさのあることを評価した永井荷風の見解に従えば⁷、作品の組み立てをも含め、「独身」もそれに数えることができる。

「キタ・セクスアリス」・「独身」のこれらの話柄は、人間における行為・行動の動機というものはわからないものだ、とカントその他の人の言葉をしばしば引く作家鷗外の意識と、どこかで結び付いているものなのかどうか。前者に「意識の奥」の語句が見え、後者で「無意識に」という語を用いてはいても、上に取り上げた箇所の場合、識閥下にまで筆をやっているわけではなく、その動機は比較的わかりやすいものであるが、しかし、このころの鷗外による翻訳作品あるいは諸文章を視野に置くと、この心理的問題が作用していなかったのかどうか、読みの上で考えさせるところがあるように

⁶ 拙論「鷗外における俊媯と天海」(『解釈』第54巻第1・2号、2008・2)参照。

⁷ 注5の拙著の第一章「永井荷風の方法意識」参照。

思われる⁸。

作品は、客が帰った後の主人が祖母からの手紙の封を切って、縁談の勧めとして富子さんという人のことが書いてある文面を読む形で示し、ランプを吹き消して独り寝の冷たい床に入ってどんな夢を見ることやら、と擱筆される。作者の鷗外は、間もなく手紙の中に書かれていた女性と結婚することになるわけであるが、子息森於菟によれば、この手紙は実際のものによったであろうという⁹。「世の中にはこの様な美しき人もあるものかと、不思議に思はれ候程に候。」としたためであることからしても、そうだったにちがいない。

その点では書簡中推奨の女性について、「性質は一度逢ひしのみにて何とも申されず候へども、伶俐なることは慥かに候。」とある表現も注目される。「キタ・セクスアリス」の十六歳の年のことで、母親と親しくなったお麗さんという娘が、「僕」の妻になりたいということをはのめかしたという一事が想起されるからである。「お母様も此娘の伶俐なのが気に入」ったと書かれている彼女は、かなりの役を勤めていた士族の娘であり、湛は、「この伶俐で活潑な娘が嫌ではな」かったけれども、早く妻を持つという気がなかったので、その縁談は自然に立ち消えになったとある。しかし、「伶俐」の語を充てており、後の小説中しばしばこの語で形容される女のことからすれば、彼女が鷗外好みの女性に入る人であったことは間違いあるまい。

「独身」の女性をめぐる話柄をおさえると、「キタ・セクスアリス」に、金井湛が留学中ウイーンのホテルにあった時、彼を連れて歩いていた大官が手を引っ張ったのを怒った女中のことが連想される。

金井君は馬鹿気た敵愾心^{ばかげてきがいしん}を起して、(中略)「今夜行くぞ」と云った。「あの右の廊下の突き当りですよ。沓^{くつ}を穿^はいて入^いらつしては嫌^{いや}。」響^{ひびき}の物に^{ごと}応ずる如しである。咽^むせる様に^{やう}香水を部屋^まに蒔

⁸ 拙稿「鷗外における翻訳の一側面—ショルツとプレヲオとの場合—」(『文学・語学』第145号、1995・3)参照。

⁹ 森於菟著『森鷗外』(養徳社、1946)の「鷗外と女性」参照。

いて、金井君が廊下をつたつて行く沓足袋くつたびの音を待つてゐた。と記す条である。「独身」では、大野が戦死者のために法会をした時のことが挙げられる。寺で来賓席の椅子に掛けていると、見物人に押されて彼の膝の間にしゃがむことになった娘の島田の緋鹿子ひがのこからの視覚的刺激と、白粉・肌や髪から発散する匂いにより、暫くの間自分の心が全く奪われ、「官能の奴隷」であったことを思い出すというものである。特にその強烈な匂いでは、湛の場合の香水の女もそうであった。

このような大野は、当地では名高い独身で、「全く女といふものなしに暮らしてゐるのだらうか」と話頭に上るけれども、本人はいたって「極淡泊な独身生活」をしており、近くの遊廓からの音もあまり気にしない。「自分の悟性ごうせいが情熱を枯らしたやうなのは、表面だけの事」と思っている金井湛であるが、「世間の人は性欲の虎を放し飼かひにして、どうかすると、其背そのせに騎のつて、滅亡の谷に墮おちる」のに対し、「自分は性欲の虎なを馴おさらして抑へてゐる」というのである。

独身生活での意識、その故にふと性にかかわる出来事を耳にしたたり、性欲を呼び覚ますような場面と遭遇したりする、両作の主人公には、その資性・閱歴に相似したところが認められる。「独身」は「キタ・セクスアリス」の、いわばその続篇あるいは外伝的一齣か、そのヴァリエーションといった趣を呈する小説と言えるであろう。

こうした作中の人物に着目するとき、やはり鷗外の代表作の一つである『雁』（『スバル』1911・9—1913・5。書き加えて1915・5、単行本として刊行）にも同様のことが見いだせる青年が描かれていることが目にとまる。しかし、「キタ・セクスアリス」の後に少し時を経て突如『雁』が執筆されたわけではなく、その間、上述のごとく、創作意識上少し関連する作品のあることが観察されるのである。このような文脈で「独身」を介するとき、鷗外における同一時期から契合する題材を得た点のある「キタ・セクスアリス」と『雁』ではあっても、それぞれの特色をより明確に現すところがあるように思われるのである。

なお、「独身」は冒頭に「伝便」という小倉における当時の風俗についての、西洋に通じた鷗外ならではの説明がある。郵便では用の足せないことから工夫された走り使いのシステムのことであるが、作中の関係叙述が、第 28 回芥川賞受賞作となった松本清張の「或る「小倉日記」伝」(『三田文学』1952・9) 執筆の一つのモチーフになったという意味でも、「独身」は文芸史的にも関心を引く短篇である¹⁰。清張作中の「小倉日記」が鷗外のそれを指すこと記すまでもあるまい。

〈付記〉本稿は、「森鷗外における「キタ・セクスアリス」から『雁』への展開」という構想のもとに考えている論考中の一節を成すものであることを諒とされたい。(放送大学客員教授)

¹⁰ 坪内祐三・川本三郎編『明治の文学 第14巻 森鷗外』(筑摩書房、2000)の川本三郎解説の「もうひとりの鷗外を追って」には、この故に「独身」を該書に収めたとある。